

■ 編集だより

編集後記

オンラインジャーナル

紙媒体をもたない査読付きのオンラインジャーナルが、このところ一層勢いを増しているように思う。初めて知る外国の雑誌から投稿を呼びかけるメールが矢継ぎ早に送られてくる。さらに、全く知らないオンラインジャーナル編集部から雑誌の査読者になってくれないかというメールさえ送付されてくる。本邦では、大学院で研究をした後、博士号を取得するのに、英文雑誌に掲載受理されることが必須条件になってきている。既成の国際誌に投稿しても受理されない場合、次の投稿先としてこの種のオンラインジャーナルが選ばれることが多くなった。オンラインジャーナル増長の背景に、迅速に論文が掲載されて、無料で閲覧できるなど新しいサービスや理念のもとに雑誌が発刊されていることがあると思われる。この新種の雑誌のなかには、PLoS One のように高いインパクトファクターをもち、在来の一流誌の権威を脅かすものまで現れている。既存の国際誌では症例報告を掲載しない方針が打ち出され、近年では症例報告に特化したオンラインジャーナルが現れてきている。この困った現象を補完する上でも、柔軟性をもつオンラインジャーナルの存在価値があると思う。オンラインジャーナルはまさにリゾーム（地下茎、G.ドゥルーズ）の仕方で増殖している。われわれはその現象に、中央集権的な既成の学問組織が覆されていく動きをみることができるかもしれない。さまざまなレベルの知見がネット上に記述され、集積されていくことは重要である。あるテーマについて、例えば治療について調べる際、また論文を書く際、文献検索をすればオンラインジャーナルもあがってきて参照の対象になる。オンラインジャーナルはすでに市民権を獲得し、制度化されているのである。医学とりわけ精神医学は、きわめて多様な事例に目を配ることを要請される。そしてその個別の誠実な記述のいわば積分が精神医学の端緒となる。その意味でも、オンラインジャーナルは、その質が担保されるなら、学問の発展に資することは間違いない。本誌のような学会機関誌は、この種の雑誌の台頭を検討しておく時期に来ているように思う。

加藤 敏